

Title	三田の考古学
Sub Title	Archeological studies at Keio University
Author	江坂, 輝弥(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.69(243)- 78(252)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第二回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田の考古学

江坂輝弥

余り十分準備ができなかつたので、もう少しいろいろ調べたいこともあつたと思います。いま近森さんからお話をありました移川子之蔵先生が一九一九年に慶應で人類学の講義を始める。その前に塾の最初の出身者で、東京高等師範学校の校長になられた三宅米吉先生が、『考古学研究』という本も出されておりますが、塾でどういう講義をされたかわかりません。恐らく日本考古学に関係のある講義だつたとお思います。先生が東京高等師範学校の校長になられた後、東京帝室博物館の鑑査官をされていた高橋健白先生が考古学の講義を担当されたということです、移川先生が来られた頃はまだ高橋先生はいらっしゃったと思うのですが、その後、高橋先生が東京帝室博物館の列品課長になられたので、博物館側では東京高等師範出身の後藤守一先生を慶應の講師に推薦されました

が、それが、何かの故障があつて慶應側で断つたということを間崎先生に私は伺いました。それが大正十三、四年のことだと思うのです。その後、大正十五年に柴田常恵先生が決まられて、昭和二年から来られたという話を間崎万里先生に伺いました。ですから、高橋先生と柴田先生の間は一年か二年、考古学らしい講義は空いたと思うのです。

そういういきさつで、三宅米吉先生が考古学に関係ある講義をされたのは明治から大正の初期だつたと思われます。移川子之蔵先生が来られたころは高橋健白先生がおられたのだというように考えられますが、そこを十分に調べようと思つて、まだ調べておりません。もう少し塾史編纂室などで調べてみたいと思つております。

そして昭和一年に柴田先生が考古学の講師に就任され

まして、今度は移川先生が台北帝国大学が創立されまして、昭和五年に赴任されました。その移川先生の最初のお弟子で、昭和五年に塾の史学科をご卒業になつた宮本延人先生が移川先生とともに台湾に行かれました。その後、昭和五年の四月から、講義がいまお話のありました大山柏先生に移ります。これは移川先生の人類学の講義の後なので、大山柏先生の講義は塾では人類学という部門に属します。柴田先生が考古学です。隔年講義であつたわけです。この講義は、大山柏先生が昭和十七年で、十八年が柴田先生で、その後たしか太平洋戦争の激化で休講になつてしまつたと思います。

そういうことで、大山先生は、昭和五年か六年から『史前講義要録』という自著を、毎年ではなかつたのですが、編集されて教科書として使われていました。全部で六冊か七冊ございます。私も四、五冊ぐらい持つております。

大山先生は、ご承知のように大山巖元帥の令息で旧公爵、陸軍士官学校から陸軍大学を出られて、一九一九年、シベリア出兵のときの輸送指揮官に拝命されたのですが、そのときに軍隊をやめるといつて軍の幹部を大分困らせたそうです。その前に、陸軍大尉のときに武官補佐官と

してドイツに行かれて、そのときに旧石器文化の研究をやろうという志を立てられて、何とか軍隊をやめる口実を探しておられたらしいのです。大正八年にやめられまして、そしてベルリン大学のオーバー・マイヤー教授のところへ留学され、そして関東大震災の直後に帰国され、大正十四年に大山公爵邸内に大山史前学研究所を創立されました。そして、いろいろなパンフレットや報告書、『史前学雑誌』などを刊行されました。それから「史前の研究」というパンフレットも昭和二年に最初に出されています。プレヒストリーを普通日本では先史学と訳していたのですが、大山先生はそれにあきたらず、歴史の前というので「史前学」という自分独特の名称をつけられたわけです。塾の講義も、ですから史前学にする講義として昭和五年から十七年まで続けられていました。

柴田先生は、ご承知のように、文部省の史跡、名勝、天然記念物の調査委員をされまして、主に歴史考古学のほうを担当されました。そして、この方面的研究著書も多い方です。

いま近森さんからお話をありました、そういう先生以外に、大正十三年移川先生と橋本増吉先生とで、横浜市

生麦で貝塚を発掘調査されています。この調査にはその当時塾生であつた宮本延人先生も参加されていますが、この貝塚で埋葬人骨も出ました。横浜市神奈川区子安町打越、通称風早台貝塚というものが今日の遺跡地名で、これが慶應義塾として最初に行つた発掘調査であります。その報告書は、『史学』の第四卷第四号（大正十四年十二月刊）に「子安池谷貝塚発掘及び人骨出土状態概報」の表題で出ております。この人骨は望月周三郎先生（解剖学教室の主任教授）が調べられて、解剖学教室の階段の下に収納されているということを、私が学生時代に望月先生から伺つたことがありますので、いまでも解剖学教室のどこかにあるのだろうと思います。『史学』の報告には出土遺物の拓本と図面が掲載されていますが、この出土遺物の土器片などは今日塾内に全然見当らないのでどうしてたものかと思つていきましたところ、私が先年、台北の、台湾大学を訪ねました時に移川先生のお弟子の宋文薰教授に台北大学の倉庫の中を見せていただきましたところ、平箱、四、五個に子安貝塚と記された縄文時代前期末の諸磯式の小さな土器破片が見つかりました。

生麦で貝塚を発掘調査されています。この調査にはその当時塾生であつた宮本延人先生も参加されていますが、この貝塚で埋葬人骨も出ました。横浜市神奈川区子安町打越、通称風早台貝塚というものが今日の遺跡地名で、これが慶應義塾として最初に行つた発掘調査であります。その報告書は、『史学』の第四卷第四号（大正十四年十二月刊）に「子安池谷貝塚発掘及び人骨出土状態概報」の表題で出ております。この人骨は望月周三郎先生（解剖学教室の主任教授）が調べられて、解剖学教室の階段の下に収納されているということを、私が学生時代に望月先生から伺つたことがありますので、いまでも解剖学

れます。塾の貝塚の発掘調査としては、これが最初におこなわれた発掘調査で、その遺物を台湾大学で発見、びっくり致しました。

その後、昭和に入りましてから、今度は渋谷から横浜に行きます東横線ができまして、日吉の土地を塾出身の小林一三さんが慶應義塾に寄付されまして、昭和十一年でしたか、日吉の予科が開校されたわけです。昭和十四年四月には、日本人類学会 日本民族学会の第二回連合大会が四谷の医学部北里記念講堂で開催されまして、その後日吉の遺跡見学とレセプションがあり小泉信二塾長が挨拶をされました。

昭和七年頃から次第に日吉の周辺が開発されまして、間崎先生、松本芳夫先生、松本信広先生など、史学科の長老の先生方が考古学に非常に興味を持たれておりましたので、塾のある山のすぐ隣の川崎市になりますが、加瀬山に古墳があるのを、掘つてみようじゃないかといふので、柴田先生と相談されて、東京帝室博物館の後藤守一先生などにも相談されて——古墳というのは従来、帝室博物館以外では調査でも掘れないというような決まりがあつて、東京帝国大学で栃木県足利古墳群とか東京の芝公園の丸山古墳を掘つたのも大分ほかから問題にされ

まして、東京大学の坪井正五郎先生が困ったというお話を伺つたのですが、それをうまく乗り切つて、前方後円墳というような関東の代表的な古墳の発掘調査に踏み切つたというのも、私立の大学としては塾が初めてだたと思います。そのときの新聞記事を、私が切り抜きしてあつたのを皆さんにゼロックスしてお回いたします。このころは、清水潤三さん、それから西岡秀雄さんが史学科の一年になられたときです。川崎市井田の横穴古墳の中から顔を出している西岡さんの写真が出ているものもあります。

昭和五年に宮本延人先生が卒業された後、昭和九年には、東京帝室博物館に入られた後、早く亡くなられましたが、須恵器の研究などで非常にいい仕事を残された森貞成さん、それからまだご健在でいま仙台におられます大給尹さん、このお二人が考古学のほうを勉強されて塾の史学科を卒業されています。大さんは考古学と言つても、縄文時代の漁具と魚の研究を大山先生のもとでされました。森さんは東京帝室博物館に入つて、後藤先生の下で古墳、ことに須恵器の研究をされました。

その後、昭和十一年には文化庁におられました保坂三郎さんが卒業されました。加瀬山古墳の調査には、森さんが外から参加されて測量などをなさり、助手格で保坂さんが参加されて、学部の学生として西岡さんと清水さんが参加したということを聞いております。

昭和十二年五月加瀬山古墳の調査の前後に日吉の大学構内の弥生時代後期の堅穴住居址群の調査がおこなわれました。現在の日吉高校の校舎の所在地から日吉の寄宿舎に向う道路を開設した場所に弥生時代の堅穴住居址の断面がたくさん出てまいりました。これは昭和十一年から十二年ごろのことです。日吉の加瀬山古墳の発掘の調査の前に、西岡さんが中心でこの堅穴住居址群の発掘調査を実施しまして、現在、ここにコンクリートでかためた堅穴住居址が残つております。これは当時の技術では最もよい保存方法であつたと思います。このような調査を嘗々と続けられまして、その後、昭和十五年八月～翌年二月まで戦局のきびしくなるさなかに、いまの教務課などの事務棟のあるあたりが、藤原工業大学という名前で藤原銀次郎さんの寄付で現在工学部の前身の校舎がここに建設されることになり、ここにも弥生時代の堅穴住居址群がありますので、清水さんが中心になつて調査されました。これらは『史学』に発表されておりますが、遺跡は全く壊滅してしまいました。

このころ以後昭和十七年頃の調査には私も時々参加致しました。ちょうどいまのラグビーのグランドの北側の台地、日吉の駅のほうから行くと右側、この住宅地となつた地下に縄文時代前期初頭今から約六〇〇〇年前の貝塚がありまして、その貝塚を清水さん、大山先生、大給さん、それから現在服部時計店の社長で連合三田会の会長である服部禮次郎さんなどと、発掘調査をした思い出があります。このころには日吉付近の縄文時代の貝塚を掘ると、いろいろなものが出土いたしました。

下組貝塚の調査というのは、その後、戦後になつても続けられまして、台状の貝塚の貝層の下から清水さんと河北展生さんや私などで、縄文時代早期の竪穴住居を発掘したことがあります。このように、日吉を中心とした調査は、昭和六年ごろから二十五、六年ごろまで続きました。普通部の構内でも、奈良時代の土師器の使われた時代の竪穴住居址を発掘したこともあります。

このようにして発掘調査が続きますとともに、大山先生は職業軍人で公爵だということもございまして、戦後のG H Qが公職追放と教職追放をどうしても解除をしてくれませんでした。——間崎先生などが大分ご奔走になつたのですけれども、G H Qの許可が出ませんでした

——、そこで昭和二十二年に、ソウルの京城帝国大学の法文学部部長もされ、朝鮮考古学の権威であつた藤田亮策先生が、千葉県の久留里のほうの山村の奥様のお里に帰国していらっしゃるというのを聞きまして、間崎先生が直接藤田先生を訪ねられて、藤田先生を講義にお招きするということになつて、昭和二十二年からは藤田亮策先生が考古学の講義を担当されました。

大学が新制に変る直前の旧制の最後の頃に、甲野勇先生が二十三年、一年間でしたが、予科の課程で人類学の講義を担当されました。この甲野先生の二十三年の講義後、新制に変わりますときに、甲野先生はのんきな方で、講義に来られても余り学校の教員室にも姿をお見せにならなかつたといふこともあります。その後、文科先生のご推薦で一年間来られたのですが、その後、文科系の新課程の人類学は自然人類学が中心というようなりもありまして、二十五年の新制が始まるとともに、東京大学理学部の人類学科の助教授であつた須田昭義先生が講師としてお見えになつて、しばらくの間は須田先生が人類学を担当され、考古学を藤田先生というようなことで、大山先生と柴田先生の講義が継続されたといふわけです。

そのうち、考古学の講義をもう少し広げたほうがいいというような間崎先生、松本芳夫先生、松本信広先生の間のご意見で、ただ考古学という名義で藤田先生がやられて、演習、特殊講義を清水さんが持たれるようになつたわけでございます。これが太平洋戦争終結後の考古学の関係の講義の発展の経過です。その後、私なども加わりまして、民族考古学の専攻というのができました。民俗学は後で、伊藤先生からお話をありますように、柳田国男先生、折口先生、池田弥三郎先生あたりと松本信広先生が嘗々として築き上げられてきたものでございます。そこで、そこにもまたいろいろの先生方が講師として参加されたわけでございます。

考古学のほうは、日吉の古墳群の発掘に続きまして、その周りで何か出たら知らせてくれということを、保坂さんか清水さんが地主さんにたのまれてきました。昭和十七年に清水先生が応召される際際に、何か変な骨の入った壺が出たから取りに来いと地主さんから連絡を受けまして、リュックを背負って清水さんが取りに行かれました。骨が入っているというので、記憶が間違つているかもしれません、たしか読経料が三円五十銭で、謝金が五円で、八円五十銭という半端な金額を包

んで持つていったのだそうです。そしてもらつてしまいまして、いま体育会のルームになつてゐる所にあつた文部の考古室の一隅に、昭和十七年に泥をつけたまま、清水さんが新聞紙に包んで転がしておいたのです。

たまたま昭和二十年の空襲の前に、松本信広先生が慶應義塾女子高校のほうの土蔵に自分の民族学の資料が入れてあつたので、そこへ変な壺だけお持ちになつたのです。それと、日吉の加瀬山古墳の遺物の一部もそつちへ移されました。あのものは土蔵の方に入り切れないのです。山梨県西北部の大泉村の井出ケ原という八ヶ岳の山麓に住む塾員で大地主の井出佐重さんという、経済学部を出て服部さんなどとも仲のいい、後に県会議長もした方の家の土蔵に疎開すべく全部荷づくりして持つていく予定の前日、八月の大空襲で考古室にあつた資料は全部焼けてしまつたのでした。それでも松本信広先生の民族資料の入つた旧徳川邸の土蔵に入れたものだけ助かり、骨壺もそれで助かりました。

私は昭和二十年の十二月末に上海から引き揚げて参りましたので、たしか二十一年か二十二年だと思うのです。が、松本信広先生のところへ、小山富士夫先生が訪ねてこられて、慶應に何か珍しいものはないですかとたずね

られましたので、戦災で焼けてしまいましたけれども、からす瓜、すすきなどのへら書き絵のある変な壺を、清水さんが加瀬山の地主からもらつてきたものを土蔵に転がしてありますと言つたら、それを見せて下さいといふことで、私がたわしでごしごしと水洗してお見せしたところ、これは素晴らしい壺だということで、小山先生が戦後に見られたことで、それから騒ぎになり、国宝に指定されるということになつたわけです。あの壺は松本信広先生が偶然にも現在の女子校のある旧徳川邸の土蔵に移されることになったならば、国宝になるどころか、戦災を受けてそのまま暗から暗に葬られてしまつたと思うのです。運よくこのような経過をたどつて、この壺は小山さんに見出されて、現在、東京国立博物館の陶芸の陳列室に出品されているわけです。

戦前の調査はこのくらいで、戦後は藤田先生が見えまして、福島県の東北部にあります真野村（現在相馬郡鹿島町）で、たくさんの古墳が開拓民が入つて壊されるというので、そのうちの二十二基を藤田先生が指揮をされまして、松本先生、清水さん、私達が参加して、発掘調査を行いました。これが終戦後における、慶應が最初に行つた組織的な発掘調査だと思います。その後千葉市検

見川の東京大学の運動場の敷地の一部の水田地帯の地下に草炭の層があり、東京都林産配給組合で戦後の燃料不足を補うため、これを長方形に切りとり乾燥させて燃料として売出されるようになり、水田地帯に幅十メートル、長さ百メートルにも及ぶ、草炭の露天掘り濠が掘られました。この草炭層は深さ三メートルぐらいで終り、その下は真黒色のきめこまかい土層となり、クルミなどの木の實、蓮の実などを含む黒色淤泥層で一種の泥炭であった。この中には樹木片、木の切り株の炭化したものなども包含されており、この層は縄文時代、約三〇〇〇年前に堆積したもので、ここがこの谷の奥の縄文時代後期末の犢橋貝塚を残した人々の東京湾で漁労をする時の舟着場であったようで、草炭層の下から櫓の大木を刳り貫いて製作した丸木舟や、犬櫓の木を彫刻して製作した櫂などが発見され、昭和二十二年十月二十一日火曜日の第一新聞紙上に写真入りで報道されました。この記事を松本信広先生にお見せしたところ、かねてから古代の舟に興味を持たれていた先生は、ここでの発掘調査の実施を速刻計画され、間崎万里、松本芳夫、藤田亮策先生なども参加され、清水さんと私とで早速現場へ行き、草炭採掘濠の先に丸木舟が一艘引き揚げられた隣接地区を発掘

したところ、前に引揚げられたものより保存状態の良い、長さ八メートル余のほぼ完型の榧製の丸木舟一艘と、艘先の部分三分の一ぐらい残つた一艘の二つの丸木舟を発掘することができました。この大きな丸木舟は黒色淤泥層の最下部、舟の底面はその下の当時の海滨の入江の波打ち際と思われる砂層の上に乗つた状態で発見されました。そして丸木舟の内部の底面には当時のものと思われる蓮の實の殻が発見されました。塾で発掘した長さ八メートルの丸木舟は、自動車部のトラックで、先に発掘された櫂三本とともに三田の研究室に運ばれ、今も三田の研究室に保存されています。そして最初に引揚げられた丸木舟は今日小金井公園にある都の武藏野郷土館に陳列され、舳先の部分三分の一の丸木舟は、この発掘調査に協力した東洋大学の史学科研究室に持ち帰られました。

これが考古学研究室による縄文時代の丸木舟調査の端緒をなすものであるが、一度このような機会に恵れると、その後は続出するもので、茨城、千葉県下を中心に塾で丸木舟を発掘した箇所は今日では十指を屈して足りぬ数になっている。

検見川調査の翌年は、当時国学院大学の専門部の学生であった野口義磨君が、国学院大の友人と千葉県南部の

館山市付近の遺跡踏査旅行に行き、安房郡丸山町加茂の角田慶一氏宅の庭前の発掘品を見学、縄文時代前期後半の土器とともに、乾燥が激しく、よく形態は見えわめられないが丸木舟の断片かと思われる木片、櫂と思われる木片が各一あり、縄文時代前期の櫂、丸木舟が庭前に埋没している可能性ありと帰京後、急報してくれたのであつた。

松本信広、藤田亮策両先生や清水さんなどと協議した上、発掘調査に踏み切ることになり、昭和二十三年十二月一日から一週間余にわたつて発掘調査、十二月七日に縄文時代前期の諸磯式土器の文化層から大榧製の立派な櫂が一本発掘され、続いて九日にさらに精巧な作りの櫂が一本出土し、丸木舟は発掘できなくても、櫂の発見により、この時代に既に舟の存在は確認されたので、まあまあ一応の目的は達したと安堵したのであつた。それで角田氏の住宅寄りの西側の地層の堆積状況の断面をきれいに出すべく、傾斜を削つて真直に断面を出すよう掘削作業を行つたところ、地下約五メートルの深さに伏せた状態で埋没している丸木舟の舳先が発見された。この発見に欣喜雀躍した調査団は調査日程を延期して椋の木製の割竹型をしたこの丸木舟を完掘したのであつた。

この成果は三田史学会の叢書『加茂遺跡』として出版されたのは、皆さんによく知るところである。

この発掘調査が機縁で塾の史学科に編入した野口君は卒業後、東京国立博物館に就職、縄文時代の土偶研究などで多くの業績を残したが、先年若くして急逝したのは実に残念であった。

当時文学部の学生でこの調査に参加した一人、若菜正君は現在、集英社の社長に栄進しており、他の諸兄もそれぞれの道で活躍しているようである。

その後、二十四年に大山先生のお父様の大山巖元帥の従卒であつたという人が青森県西津軽郡館岡村亀ヶ岡遺跡の地主さんで、いま重要文化財になつてゐる土偶を持つていた人ですが、慶應に大山さんの令息がおられるのなら、ぜひとも慶應で亀ヶ岡遺跡を調査してほしい。

いろいろと便宜もはかりますからという依頼を私が受けてきて、間崎先生に相談をいたしました。そして、昭和二十五年の夏に亀ヶ岡遺跡の調査ということになつたわけでございます。このようにいたしまして、戦後の第三番目の調査は、大山先生は行かれませんでしたが、大山先生に関係ある人の縁故で亀ヶ岡泥炭層遺跡の調査がでることになつたわけでございます。

このようにして、慶應の民族考古学研究室整備には、朝鮮からお帰りになつた藤田先生の並々ならぬご努力があつたと思うのですが、それに清水さん、それから若い近森さんとか、いろいろ卒業生も出てまいりまして、やつと軌道に乗つたわけだと思います。戦争前の話をすと、大山先生とか柴田先生はよそからお呼びした人だから、将来、塾生の中から考古学を専攻する人たちがたくさん巣立つたら、考古学を史学科の中の一つの専攻としてやれるようにしたいものだというお話を、昭和十四年、五十年代によく間崎先生から伺つたことがあります、それがどうやら軌道に乗つたということで、間崎先生もきっと喜んでいらっしゃるだろうと思います。

近森 どうもありがとうございました。

いま江坂先生のお話を伺つていると、三田の考古学、民族学は近代日本におけるこの方面的の学問の一つの曙の時代を同時に担つていたということがよくわかります。移川子之蔵先生が人類学という言葉を使われたのも、おそらくアメリカのクラーク・ウイスラーなどが使つていたアンソロポロジーという言葉を訳してこういう言葉にされたのだろうと思います。おそらく早い日本語訳だつ

たのではないかと思います。またドイツで言っていた
プレヒストリーを史前学というふうに大山柏先生が訳さ
れて、これもまた三田で講義を持たれるというようなこ
とで、日本における近代科学としての人類学、考古学の
曙の時代が、三田史学の活動とともに始まったというこ
とではないかと思います。

実はこれからお話しいただく柳田国男先生の土俗学、
あるいは民間伝承論も、こういう題目で三田に民俗学の
講義が置かれたのが、日本では最初のことであったので
す。

今度は民俗学、あるいは民族学、東洋史の立場から伊
藤先生に、先ほど申し上げましたように、柳田国男先生
から松本信広先生あたりにいたる背景をお話しいただき
たいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。